



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 74 号 2018 年 3 月 31 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

＜第 25 回大会準備委員長挨拶＞

高村和代：青年心理学会第 25 回大会を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

＜「学会賞受賞」のことば＞

石黒香苗：第 8 回学会賞を受賞して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

＜特集：日本青年心理学会第 25 回大会＞

堀内 綾：日本青年心理学会第 25 回大会に参加して・・・・・・・・・・・・ 3

濤岡 優：青年期にある立場として学会に参加して・・・・・・・・・・・・ 3

高田治樹：日本青年心理学会第 25 回大会に参加して・・・・・・・・・・・・ 4

小高 恵：青年心理学会第 25 回大会に参加して・・・・・・・・・・・・・・ 4

山口昌澄：場をつくる難しさ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

吉田琢哉：はじめての青年心理学会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

＜書評＞日本青年心理学会（企画）『君の悩みに答えよう-青年心理学者と考える 10 代・20 代のための生きるヒント』福村出版（2017 年刊）

南 雅則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

杉坂郁子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

＜広報＞

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ・・・・・・・・・・・・ 7

事務局からのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

＜第 25 回大会準備委員長挨拶＞

青年心理学会第 25 回大会を終えて

大会準備委員長 高村和代（岐阜聖徳学園大学）

2017 年 11 月 25 日（土）～26 日（日）に岐阜聖徳学園大学岐阜キャンパスにおいて、第 25 回大会を開催させていただきました。大会への参加者は 83 名と少々寂しい学会となりました。しかし懇親会への参加者は 50 名と、半数以上の方にご参加いただくことができました。また、研究発表 21 件および自主シンポジウムが 1 件と、例年以上に多くの発表が揃い、大変内容が豊富な大会となりました。地の利の悪い場所にもかかわらずご参加いただき大会を盛り上げていただいた方々に、この場を借りて心より感謝申し上げます。しかしながら、4 件の発表を同時に進行するというタイトなプログラム構成になってしまいました。“じっくりと発表を聴き、じっくりと議論を深める”という本学会の良さを活かす事ができず、残念に思うのと同時に、もっとプログラム構成に工夫ができたのではないかと反省しております。

本大会では、研究発表や自主シンポジウム以外にも、名誉会員の植田千晶先生による記念講演、浅野良輔先生（久留米大学）による研究セミナー「青年心理学で活かすマルチレベル分析」、研究委員会企画シンポジウム「現代青年の日常の活動に対する評価-研究委員会共同調査の結果に基づく検討-」、実行委員会企画シンポジウム「学校はモラトリアムとどう向き合うか-青年心理学が果たす役割-」など、非常に充実した内容となりました。本大会を振り返ってみますと、今一度「青年とは」に立ち返ったうえで、発達心理学領域を超えた近接領域の視点を取り入れ、これからの「青年心理学研究」の方

向性を再考することができた学会となったのではないかと、手前味噌ながら考えております。今後も「青年心理学会」および「青年心理学研究」の更なる発展を願い、次期大会の京都大学へお渡しします。

また末筆になりますが、発表論文集内の数々の誤植や昼食時の想定外のトラブルなど、皆さまには多くのご迷惑をおかけいたしましたこと、心よりお詫び申し上げます。

<「学会賞受賞」のことば>

第8回学会賞を受賞して

石黒香苗（東京大学大学院）

この度は、日本青年心理学会賞を授与していただき、感謝申し上げます。大変光栄であるのと同時に、身の引き締まる思いです。

「大学生の進路選択」に関心を持つきっかけとなったのは、学部時代にドイツへ留学したことでした。ドイツでは、多くの大学生が自分の専攻と関連のある職に就くということとなるため、学部選びは非常に重要な選択となります。そのような中で、自分に合わなかったために専攻を途中で変える人もいれば、大学入学前にインターンやボランティアをして「自分が何をしたいか」をじっくり考える人もいる、など、多くの人が年齢や周囲の選択に囚われず柔軟に自分の進路を歩んでいるのを目の当たりにし、日本の進路選択の特異性を感じました。そして、これまで私自身がいかに「一直線」の進路を歩み、それ以外の選択を排除していたか、ということに気が付かされました。

その背景には、「一直線のルールから外れること」が「失敗」とみなされやすく、許容されにくい文化や仕組みがあると考えられます。同時に、私たち自身も「失敗」に対する恐れや不安が強いのではないかと、とも思います。そのようなことを考えはじめ、人はどのように「希望通りでない進路選択」を受け止めるのか、ということに関心を持ち、今回の研究へと繋がりました。今後益々、従来のような一直線の進路を歩むことは難しくなっていくことが予想されています。その中で、どのように考え、行動することができるのか、私自身やこれから進路選択を行う青年期の人々に対する問題提起でもありました。

この度、このような賞をいただけたことは、研究を進めていく大きな励みとなりました。まだまだ若輩者ですが、よりよい研究ができるよう尽力いたします。最後に、研究にご協力いただいた方々をはじめ、ご指導くださった先生方や査読をしてくださった先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。

<特集> 日本青年心理学会第25回大会

昨年11月、岐阜聖徳学園大学にて[日本青年心理学会第25回大会](#)が開催されました。大会では、今後の研究の発展につながる討論のできる十分な時間が用意された口頭研究発表の他、青年心理学研究法セミナー、名誉会員記念講演、研究委員会企画シンポジウム、大会準備委員会企画シンポジウム、自主シンポジウムなど、さまざまな企画を通して活発に研究交流が行われました。これらのプログラムを通して、大会に参加された先生方それぞれが、お互いに啓発し合うことができたのではないのでしょうか。今回は、大会にご参加の先生方、そして大会を運営する立場の先生から感想をご寄稿いただきました。ご執筆いただきありがとうございます。

（担当：三好昭子・佐方哲彦）

日本青年心理学会第 25 回大会に参加して

堀内 綾（上越教育大学大学院）

この度、日本青年心理学会第 25 回大会発表にて発表の場を与えていただき感謝申し上げます。今回、「本来感と諦めに対する認知が主観的幸福感に与える影響」について発表させていただきました。この学会が、私にとって初めて発表する学会であり、とても緊張していました。発表前よりとても緊張しており、失敗しないかと考えてしまっていたのですが、色々な先生方よりお声をかけていただき、安心して発表に臨むことができました。直接伝えられず恐縮ですが、この場をお借りして感謝の言葉を申し上げます。口頭発表では緊張してしまい、至らなかった部分もありました。質疑応答では、様々な意見を聞くことができ、とても勉強になりました。この発表で感じたことや、先生方よりご指摘いただいたことを今後の研究に生かしていきたいと考えております。

他の先生方の発表も大変勉強になるものが多かったです。自分が今研究している分野と関連する研究発表もあり、大変刺激を受けました。セミナーやシンポジウムの企画でも、学ぶことが多かったです。

懇親会にも参加させていただきました。懇親会では、たくさんの先生方と交流することができました。このように、先生方と交流することが貴重な経験になり、肥やしになりました。

青年心理学会は「アットホームな学会」ということ耳にしていたのですが、その通り発表もしやすく細かく指導してくださる印象を受けました。

また、今回の学会ではお世話になった先生方、友人とも再会でき、大学時代を過ごした記憶が蘇り、懐かしさを覚えると共に有意義な時間を過ごすことができました。

この学会を通して、多くの貴重な経験ができたことに感謝いたします。また、このような経験ができたことを嬉しく思います。

最後になりましたが、今大会を企画、準備してくださった先生方や関係者の皆様に大変感謝申し上げます。

青年期にある立場として学会に参加して

濤岡 優（北海道大学大学院）

今回の青年心理学会での発表は、私にとって初めての学会発表の経験でした。発表に備えて準備をしている段階では、発表内容の吟味で頭がいっぱいで自分の研究内容を公の場で発表することがどんな意味をもつのかを、考える余裕はありませんでした。しかし、実際に発表を終えてみて、また何人かの方から発表に対しての質問や意見をいただいて、自分の研究や関心が、青年心理学という研究領域においてどのような位置づけをもち、どのように受け止められるのか、改めて認識することが出来ました。そして、今自分の見えていること、知っていることが、取るに足らないものであることも痛感しました。

しかし一方で、研究を続け発表を重ねることは、ただ自分の研究を良くしていくこと、結果を残していくことにあるのではなく、自分の捉える問題・関心を発信することで誰かとそれを共有し、人間が発達する上でより良い環境が何かを、一緒に考え続けていくことにあると、実感をもって理解することができました。これは、自らが発表するという経験を通してのみではなく、準備委員会の方が企画してくださったシンポジウムへの参加を通して感じたことでした。先生方が「今の青年たちに対して、青年心理学者は何が出来るのか」について意見を交わしているのを見て、先生方が研究者としてどんな思いで青年に向き合っているのかを知ることができ、尊敬の思いを持ちました。私は自分がまだ青年期の段階にいる人間という立場も持っているもので、まるで自分自身のことを議論されているように感じたと同時に、自分もいずれは青年期を外側から見る

立場になっていくことを想像すると、不思議な感覚を抱きました。

私自身、昨年1年間の中で自分が研究を続けることに何の意味があるのか、ずっと悩み考えながら、博士課程への進学を決めました。そのような私にとって今回の学会は今後自分の希望する進路に進む上で大きな刺激となり、今までとは違った研究に対する見方、思いを持つ機会となり、参加できたことを嬉しく思っています。

日本青年心理学会第25回大会に参加して

高田治樹（立教大学 キャリアセンター）

この度、日本青年心理学会第25回大会に参加し、研究発表をさせていただきました。まず大会委員長の高村先生をはじめ、大会の企画運営や準備に尽力してくださった先生方に感謝申し上げます。

さて、青年心理学会大会に参加するのは四度目ですが、近年、青年心理学会大会は非常に高度な統計手法を用いた発表がされている印象があります。本年は、浅野先生によるマルチレベル分析のシンポジウムがあり、非常に勉強になりました。また、発表でも様々な統計を用いた研究も多くみられ、今後の大会ではより高度な研究が発表されるかと思うと、内心ではついていけるか不安を覚えます。一方で、一昨年の大会で大野先生が「質的研究指針」として報告されたように、高度な統計手法に依らない質的研究が発表されていることも青年心理学会の懐の深さが表れているように感じます。統計が出来ることは素晴らしいですが、統計だけが心理学ではないので、今後も、様々なアプローチの研究が出てくるのが楽しみです。

また、自身の口頭発表では多くの先生方にご意見を頂けたことに感謝申し上げます。ただ、個人的な反省点として、資料準備が足りなかったことが悔やまれます。青年心理学会大会は発表時間が長く、資料を読み込む時間も十分にあるのだと痛感しました。もう少し、資料準備を丁寧に進めておけば、より発展した議論が出来たのではないかと強く感じております。昔、「研究は発表・論文にしてこそ研究だ」と、先輩に言われたことを思い出しました。改めて、発表にも力を入れねばと思ひ至り、来年度に向けて意欲が湧いてきました。

最後に、ニューズレターの寄稿について依頼頂きました広報・ニューズレター編集委員の先生方に感謝申し上げます。懇親会に参加したこともなく、あまり積極的に青年心理学会の活動に関わっていなかったため、今回の寄稿で少しでも学会に貢献できたことは、青年心理学会員としてのアイデンティティが刺激され、喜びもひとしおでした。今大会で関わらせて頂きました皆様に深謝申し上げます。

青年心理学会第25回大会に参加して

小高 恵（太成学院大学人間学部）

今年、青年心理学会第25回大会に参加することができました。今回、座長のお話をいただき、久しぶりにロングセッションの座長を務めさせていただきました。担当させていただいたセッションでは、中国と日本の大学生を比較した自我発達についての研究や中学生の子どもとその母親を対象にした母子関係の研究、未就学の子どもとの親のペアを対象にした研究の発表がありました。どの研究も貴重なデータに基づいたユニークな研究で、一つ一つの研究が非常に興味深いもので議論も活発になされ、時間はあっという間に過ぎてしまい、会場全体がもっと知りたい、もっと議論したいという雰囲気になりました。今回、青年心理学会で座長の機会をいただき本当に感謝しています。自分自身の研究を振り返ることもできましたし、多くの刺激を受け、これからの研究の動機づけにもなりました。

名誉会員記念講演では植田千晶先生の貴重なお話をうかがうことができ、大変有意義

な時間を過ごすことができました。先生には私が大学院生の頃から関西地区の青年心理学会研究会で色々とお世話になっていましたが、これまで講演という形でお話をお聞きする機会がありませんでした。今回、先生のこれまでのご経験や考えなど色々なお話を聞かせていただきまして本当にありがとうございました。

懇親会では多くの先生方や若い院生の方と交流ができ、楽しく和やかな時間を過ごすことができました。青年心理学会の良さの一つはやはりアットホーム雰囲気ではないでしょうか。論文でお名前を拝見しておりましたが、これまでお話をうかがうことができなかった先生方とも初めてお話することができて本当に良かったと思っています。今後の研究の活力を与えていただいたと感謝しています。

最後になりましたが、大会を準備・運営して頂いた準備委員会の先生方、スタッフの皆様には深く御礼を申し上げます。

場をつくる難しさ

山口昌澄（高田短期大学）

このたび日本青年心理学会第25回大会の研究委員会シンポジウム「現代青年の日常の活動に対する評価」において、話題提供（「日常活動・生活時間への意味づけの“意味”」）をさせていただいた。恥ずかしながら全国的な学会発表としては、約10年ぶりとなる。今回発表したデータは研究委員会の共同研究のものだったが、分析に予想以上の時間がかかってしまった。よって「こんな感じで」という発表における着地点が、いつまでも見えてこなかった。だが今回は個人発表でなく、研究委員会シンポジウムである。調査にお力添えいただいた委員の先生方の労力も考えれば、中途半端なものを出すわけにはいかない。そうした焦りにも似た気持ちを抱え時間も過ぎていったが、間際でようやく分析の目途もつき、発表日を迎えることとなった。

当日は司会を務めていただいた委員長の進行手腕にも助けられ、何とか終えることができた。内容的には、現代青年の日常生活における様々な活動への意味（意義）づけについて、フロアとのアイデア共有ができたのではないかと思われる。特に分析した結果、何事も一生懸命に取り組みながら、周りから遅れることの不安を抱えた群（「高コミット不安群」）が見いだせた点について、一定の関心や共感を得られたように感じた。

だが個人的に課題を多く感じる発表となった。反省点は数多いが、最も反省したのは「研究発表」に終始してしまった点である。無論今回は共同研究報告の機会であるので、間違っていない。だが話題提供者として重要な役割である「フロアの議論の深まり」という点に関しては、不十分なまま、消化不良気味に終わってしまった。

以上であるが、指定討論の先生方、フロアからも貴重なご示唆をいただき、何より「ともに学ぶ」という学会発表の基本を再確認できたことは、個人的に意義深い経験となった。記して感謝申し上げたい。

はじめての青年心理学会

吉田琢哉（岐阜聖徳学園大学）

大会準備委員として、初めて日本青年心理学会大会に参加させていただきました。広報・ニューズレター編集委員の先生方より、非会員の立場から大会を見て思ったことを伝えてほしいとのご依頼を受けまして、僭越ながら雑感を述べさせていただきます。

青年心理学会ならではの特徴として感じ入りましたのは、ひとえにその温かさにあります。研究発表には十分な時間が与えられ、質疑の内容も支持的かつ建設的なものばかりで、組織としての凝集性の高さを伺わせるものでした。学会の温かさを特に実感したのは、ホテルグランヴェール岐山にて開催された懇親会でのことです。大会委員長の高村先生の御挨拶の中で、スタッフ一同も壇上に招いていただきました。スタッフは

陰の存在として下支えに徹するものというイメージを持っていた私には予想外のことで驚きました。後ほど会員の先生に伺うと、青年心理学会の懇親会では恒例とのことでした。細やかな配慮が表れていて、とても良い雰囲気を感じました。

また、手前味噌になってしまいますが、学会スタッフとして動いてもらった本学教育学部3年次の学生たちには力強く支えてもらいました。学生の大部分は教員を目指し、一年生の頃から実習を通して鍛錬を積んでおります。大会2日目には弁当不着という不測の事態が起きましたが、近隣のお店で弁当を買い集める（買い占める）という対応を迅速にとってくれました。ご迷惑をおかけしてしまいました先生方に深くお詫び申し上げますとともに、陰で支えてくれた学生たちに、この場を借りて感謝の意を述べさせていただきます。

私個人としましては、会場係として貴重な研究発表を拝聴できるという特権に預かりつつ、休憩室に用意しました柿を剥き続けるというほんの些細な仕事しか行っておりませんが、この柿は本学短期大学の先生のご実家で実っていたものをお譲りいただいたものでした。同じく休憩室に用意しました栗きんとんと共に、岐阜らしさをご来場の先生方に少しでも感じていただけたのでしたら幸いです。

私事が続いて恐縮ですが、本年6月には今回の経験を活かし、同じスタッフで東海心理学会を開催します。至らぬ点も多々あったかと思いますが、これに懲りず、もしご都合がよろしければこちらの学会にも足を運んでいただけたら幸いに存じます。

<書評> 『君の悩みに答えよう』

-青年心理学者と考える10代・20代のための生きるヒント-

日本青年心理学会（企画）福村出版（2017年刊）

今回は青年心理学会企画の本書が出版されたばかりですので、会員・非会員と幅広く、しかも中学・高校の学校現場をご経験の先生方に書評をお願いしました。ご寄稿ありがとうございました。

<書評>

南 雅則（宝塚市立光ガ丘中学校）

私は中学校の教員をしている関係上、中学生の様々な問題や悩みに接することがある。「勉強のやる気が出ない」、「部活でもめている」、「友だちに無視される」、「LINEでラブっている」、「親がウザイ」といったものが多い。そうした悩みを抱えている中学生、そして卒業していった教え子たちにもこの書を読んでほしいと思う。どこから読んでも、どこを読んでもかまわない。今の自分に対する何かのヒントがここにあるように思う。この書は、帯にもあるように「青年の心を研究している専門家たちが多感な年頃に抱きやすい悩みや違和感に全力で回答」した書である。生き方、政治・宗教、進路・就職、学業、友人関係、SNS・ゲーム、親子関係、気分・性格、恋愛、身体に関する様々なテーマに対して、平易な文章でわかりやすく一問一答形式（見開き2頁）で書かれている。しかし、平易な文章とはいっても、内容的には今日までの様々な知見が随所に引用されており、説得力のある明快な回答となっている。また、特定の考え方を押しつけようとするのではなく、「自分で決めて動いていきませんか。私たちも応援しますよ。」というメッセージが感じられ、どこまでも青年の可能性を信じる執筆者の思いが伝わってくる。

そして、何よりありがたいと思うのは、この書が恋愛や身体についての悩みを真正面から取り上げている点である。なぜなら、青年心理学のフィールドにおいてはごく当たり前のことであっても、中学校や高等学校の教師にとっては、相談を受けても（養護教諭を除いて）ちゃんと答えてあげられないテーマだからである。生徒たちの恋愛や身体についての悩みに、あえて触れないようにしているのかもしれない。今思うことは「あの時にこの本読んでいたらなあ」ということである。青年心理学の専門家はもちろんのこと、小学校、中学校、高等学校の教師、そして青年とかかわる方々に是非読んで頂き

たい書である。

<書評>

杉坂郁子（帝京大学短期大学）

私は、中学校・高等学校の現場で数十年間いわゆる「KKD（勘・経験・度胸）」で突っ走ってきた。学校現場は生徒一人ひとりが抱えている目標や価値観、興味関心がそれぞれバラバラに息づいている世界である。学生時代学んだ教育理論はまったく役立たず、日々達人（先輩教員）から盗んだ「職人芸」がすべてだった。

ところが管理職になり教員への指導的立場に立った頃、「KKD」に頼ることだけに限界を感じ始めた。生徒たちの抱える問題や悩みが年々複雑化してくる中、若い先生方も十人十色であり、技術や方法論だけを教えても役に立たない。生徒たちが心の奥に抱えているものを知り、生徒と接するときの「考え方」そのものを理解してもらう必要がある。エビデンスに基づく教育実践の必要性も強く感じた。

「君の悩みに答えよう」の「君」はもちろん青少年であるが、敢えて「教員」と解釈した。教員は学び続けなければならない職業であるにも関わらず多忙であり、調査によると、中学校の教員の1日の平均読書量は15分にも満たないとも言われている。本書はQ&A方式見開き1ページで、心理学者の学説や調査データに基づいた説得力あるアンサーが具体的に分かり易くかかれている。時間のない時には、直面している部分だけを開き、それぞれの項目ごとの「おすすめ図書」などを参考にすることもできる。まさに教員にとって手元に置いておきたい書である。

最後にひとつ注文をつけたい。時代は益々目まぐるしく生活形態も変化し、何年か後には、現在では想像も出来なかった新たな青少年の悩みが出現してくるだろう。さらに青少年自身についても（例えば9章で述べられている「男女の発達が最近逆転しているという指摘もある」ように）かつての青少年とは異なる傾向や分析も出てくるだろう。ぜひ、長いスパンで考え、第2弾、第3弾の執筆をお願いしたい。

<広報>

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ

第72号より、会員の皆様から意見や要望を募るとともに、自由な投稿・寄稿を促すことにしたとアナウンスさせていただきました。投稿・寄稿ルールについて、再度簡単に説明させていただきます。

●会員から募集するのは、以下の5つです。

①特集テーマに取り上げて欲しいトピックス 「特集テーマ提案」

随時募集。過去のNL記事を振り返りつつ、編集委員会で検討し決定します。

②書評に取り上げて欲しい書籍 「書評推薦図書」

随時募集。原則として最新号発行1ヶ月前に集約し掲載します。

③書評執筆の希望 「書評執筆希望」

掲載書籍への書評執筆の希望者を、原則として最新号発行後1ヶ月間募集します。該当書籍をお持ちでない場合には献本いたします。

④次号の特集テーマに関する投稿の申し込み 「特集テーマ投稿希望」

特集テーマへの投稿希望者は、原則として最新号発行後1ヶ月間募集します。

⑤会員からの情報や意見の自由投稿 「投稿：会員から」

随時募集。投稿内容が本学会のNLの記事に相応しいかを編集委員会で検討し、掲載の可否を決めます。不掲載の場合は、投稿者に理由を開示します。

- 投稿・寄稿時には、必ず件名を「」内の通りとし、本文の最初にお名前と所属・連絡先メールアドレスをお書きください。
- 書評および特集テーマへの執筆候補者は基本的に以下のように決定します。なるべく執筆希望者を優先しますが、編集委員会において会員の先生方の専門や経歴のほか、最近の寄稿状況を把握し検討したうえで執筆候補者を絞り込み、改めて執筆を依頼します。
- すべての投稿先は、jsyap-nec@googlegroups.com（日本青年心理学会広報・ニュースレター編集委員会）です。
- 原稿の字数は 800 字程度を原則とします。
- 第 75 号では、2016 年 1 月から 3 月にかけて会員の皆様にご回答いただいた「研究委員から日本青年心理学会に関するアンケート」の結果をご報告させていただきます。また、アンケート結果をもとに、日本青年心理学会についての意見などについても寄稿頂こうと考えています。これを機に、日本青年心理学会の今とこれからについて、会員一人一人がお考えいただければと思います。（研究委員会委員長 高坂康雅）

事務局からのお知らせ

I. 2018 年度大会のご案内

開催日程:2018 年 10 月 27 日（土）～28 日（日）

開催場所:京都大学吉田キャンパス吉田南構内

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus/map6r_vs.htm（吉田南構内）

参加・発表申込み、大会プログラム等の詳細は、随時ご案内していきます。

***紅葉シーズンの前でホテルの予約が難しくなると聞いています。
遠方より参加予定の方ははやめにホテルを予約してください。**

お問い合わせ:日本青年心理学会第 26 回大会準備委員会

委員長 溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター）

E-mail : mizokami.shinichi.4u@kyoto-u.ac.jp

II. 学会メーリングリストをご利用ください

- ・現在、電子版ニュースレターや大会・研究会などの案内を、学会メーリングリストによって配信しています。会員であれば、青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなどの案内を、このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上、事務局からのみの発信となりますが、どうぞご利用ください。

日本青年心理学会事務局

The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室内

TEL : 075-753-3047

E-mail : seinenshinri@gmail.com

Website : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>

振替口座 : 00940-6-273417

口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願いいたします。